

の部分が見出でき、患側腎全体の血流低下が特徴的に見受けられた。小さい場合は検出できないこともある。腎動脈瘤は血流相で集積像としてみられることがある。Perfusion index の応用は、今回は一応有意な所見が得られたが、今後の検討が必要である。

16. Tc-99m-DTPA レノグラムによる GFR の測定法と臨床的意義

海津 啓之 町田喜久雄 本田 憲業
瀧島 輝雄 斉藤 正身
(埼玉医大医療セ・放)
高橋 卓 斉藤 博 (同・泌)

従来の Gates 法は、簡便に GFR を計測することが可能であるが、dynamic image を得ることはできなかった。われわれは、Tc-99m DTPA 15 mCi を用いる Gates 変法により、GFR の計測のみならず、視覚的診断のための dynamic image を得ることができた、この方法から得た GFR 値 (X) を内因性クレアチニン・クリアランス値 (Y) と比較検討した。対象 27 例 [平均年齢 48.8 歳 (SD 14.2), 男:女=10:17] において $Y=1.3X-3.1$, 相関係数 0.81, $p<0.001$ と良好な相関を示した。われわれの用いた Gates 変法は GFR 測定、およびシンチグラムによる視覚的診断が同時に行える点が臨床的に有用であると思われた。

17. 経直腸門脈シンチグラフィにおける直腸注入用カテーテルの改良

村田 広重 塩見 正雄 伊藤 進
(埼玉医大・三内)
山崎 節雄 関 守雄 真下 正美
宮前 達也 (同・放)

経直腸門脈シンチグラフィにおける直腸注入用カテーテルを改良し、若干の知見を得た。改良型カテーテルは、従来の物より内径が 1.6 mm 狭く先孔とした。このことより硬度がやや増し、カテーテルの挿入が容易になり、また、カテーテルの圧迫を減少させ核種の逆流が防止された。核種注入後の 10 秒間隔 15 分間の time-activity curve でも、Maximum counts が従来のカテーテル使用時に比し、有意に高値を示した。以上より、改良型カテ

ーテルによる経直腸門脈シンチグラフィの image は従来法に比しより鮮明になることが判明した。さらに、放射能活性を用いたデータ解析においても、より正確となることが示唆された。

18. 下肢 RI ペノグラフィにて肝の描出がみられた一症例

石川 演美 武田 徹 角田 博子
中島光太郎 秋貞 雅祥 (筑波大・放)

肺栓塞症がうたがわれた症例のうち、深部静脈血栓症に原因していると思われる症例については、当科では下肢静脈より $^{99m}\text{Tc-MAA}$ を注入し、情報の付加を計っている。膀胱癌術後の 1 例において、下肢ペノグラフィを行ったところ、肝へ、びまん性の集積がみられた。 $^{99m}\text{Tc-PYP}$ にて再検したところ、下腹壁静脈を経由する側副血行路が証明された。In-111-oxine 血小板シンチでは、異常集積はあるが不十分であった。

19. 肝腫瘍の鑑別診断に際し肝シンチグラム SPECT 像が有用であった症例

藤本 肇 内山 暁 可知 謙治
荻込 正人 日原 敏彦 斉藤 吉弘
荒木 力 新井 蒼夫 (山梨医大・放)

超音波ならびに X 線 CT の普及により、肝腫瘍の早期発見の手法としては、肝シンチグラムはルーチンには用いられない。

われわれは、肝腫瘍の鑑別診断上、肝シンチグラム SPECT 像が有用であった症例を経験した。いずれも日本住血吸虫症がベースにあり、特有の肝の変形、石灰化、脂肪沈着等により、超音波や X 線 CT にて必ずしも正確な所見がとれなかった。

このような場合、特に、肝腫瘍を否定する手段として、正常肝組織の存在を証明する肝シンチグラムは大いに有用であり、積極的に施行すべきと思われた。